

# 桜井市芝・箸中の

## ガランサンのお渡り行事

②

更に奈良県立図書館蔵の『磯城郡社由緒調二冊之内二(明治三十五年)には、慶長十三(一六〇八)年の古い莊敵組記録の他に、

- ・御渡りに四老までが烏帽子(えぼし) 大紋で供奉(ぐぶ)すること
- ・直会(なおらい)の品目
- ・ソ子市(巫女(みこ)による御湯(みゆ)
- ・天の山神社までの御渡りが廃され、芝だけで上(かみ)街道沿いの緒環(おだまき) 塚まで渡御(とぎよ)をする形に変更したと記載される。

箸中(はしなか)の国津神社側の記録は、同じく磯城郡社由緒調や、箸中の元区長であった故の場英雄氏の『桜井市箸中の氏神 国津神社の沿革に就いて』(昭和五十四年刊)、他に記載があった。

・国津神社の神事は、左右両座の宮座及び敬神講により行われる。

### 民俗通信

6 中野 和正

新なら

# 文化

## 神々を偲ぶ「天の山」

頭に青竹を差入れ、装束を仕立て、胴体を造り、これを掲げて国津神社境内の末社・市杵島(いちきしま)神社の池を七回廻(まわ)ったが、これも廃された。

御祭礼は旧暦九月九日、八日の宵宮に本神様が、金屋の天の山の仮御殿へ御旅をなされ、本殿が留守となる故に十人衆が留守居役を務める。両村の争論が起こり「ガランサンのお渡り」が停止となり、後は御神体の屋の天の山に向かったと想定

◆金屋「天の山」

天の山までの御渡りの道筋については史料がなく不明だが、出発した列次は上街道を南進し、三輪の町を抜け、御旅所(おたびしょ)とした金屋の天の山に向かったと想定

できる。

大神神社蔵の『三輪山絵図』にも三輪を過ぎた上街道脇に社が描かれ、「天の山」と記されている。現地は三輪の市街地に隣接した金屋の山垣内(かいと)で、志貴御県坐(しきのみあがた)にます。神社飛地境内となつているが、空き地である。元は、ここに敵島(いつくしま)神社が鎮座して、大正元(一九一二年)に金屋本村の志貴御県坐神社に遷(うつ)された

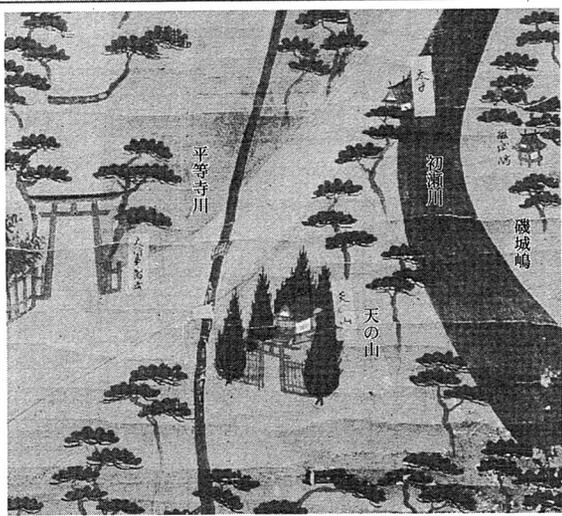
磯城瑞垣宮 崇神天皇の皇居にして初瀬川と平等寺川との間、氏神・志紀御縣神社の南西、三輪と接する地に天の山あり、俗に天の山の宮と云ふ、其地又天の山と字す、宮跡は此地ならん。蓋(けだ)し天の山は天皇山の転訛(てんか)にして、崇神天皇を祭れる天皇社なるべし。此地初瀬川・平等寺川(水相擁して、自ら墻垣(しようえん)をなすの状あり、水垣の宮名又斯に基くか。

県内の事例では、淳名城入姫命(ぬなきいりひめのみこと)の伝承とも関連がある、四月一日の天理市大和(おおやまと)神社の「ちゃんちゃん祭」。また、崇神朝に創建されたという宇陀市の墨坂神社の十一月二日と三日の御渡りは、西峠(墨坂)に近い元鎮座地であった「天の森」を御旅所としていた。これらと比較すると、元は檜原(ひばら)社の大祭として行われたお渡り神事が、神主の大賀茂氏滅亡後、芝と箸中の両社と宮座で主催継承された」と考えられる。天の山は崇神天皇の宮「磯城瑞垣宮跡」とされ、天照大神(あまてらすおおみかみ)が、この地に祀(まつ)られていた御事蹟を偲(しの)ぶもの。或(ある)いは、豊鍬入姫命(ゆすきいりひめのみこと)が、「倭笠縫邑(やまとかさぬい)のむら」に大御神を祀られた御神事を偲ぶものであろうか。いずれにしても、この御神事は三輪地域の伝承を体現した、意義ある祭事であった。

という。『磯城郡誌』(大正四年刊)では、この場所が磯城瑞垣宮跡(しきのみすがきのみやあと)とあり、としている。

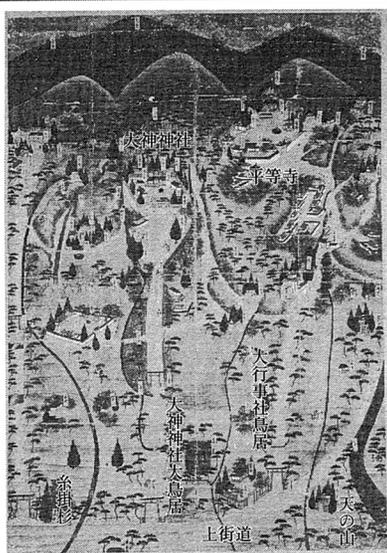
かつての九日神社・国津神社の祭礼は、御神体の頭に青竹や藁(わら)で胴を拵(こしら)え、衣装を着せ、合わせて十柱の神々をかかて、旧暦九月八日、金屋の天の山に設けた御旅所に向けた遷幸(うつりゆき)と、翌九日の還幸であった。

この御神事は三輪地域の伝承を体現した、意義ある祭事であった。



天の山(『三輪山絵図』部分)

上下の写真は大神神社提供(活字は筆者の追加)



檜原神社 檜原神社二之鳥居

檜原神社大鳥居

『三輪山絵図』(室町時代、大神神社蔵)

	なかの・かずま	
	春日大社権禰宮	
	この項おわり	